

## 井上周八先生記念号によせて

井上周八先生は、1957年10月に立教大学経済学部助手として就任され、以来1990年3月定年退職されるまで、33年の長きにわたって本学ならびに経済学部の発展に尽力され、学問の府としての本学の名声を大いに高められました。

先生は経済学部において、農業経済学および経済政策論を担当されて多くの学生の教育に当られるかたわら、ゼミナール・大学院における研究指導により、外国人留学生を含めて多くの研究者の育成に努められました。この間、学生相談所所員、河西奨学金選考委員、就職部委員などを担当され、学生の勉学や就職などに、熱心な指導をされてこられました。

先生の経済学における研究業績は、学位論文『地代の理論』（理論社、1963年2月）、『農業経済学の基礎理論』（東明社、1967年2月）などの農業経済学の一般的、基礎的分野および『現代マルクス経済学』（亜紀書房、1972年2月）、『経済学一解説と研究』（文真堂、1979年5月）など経済理論一般の分野とともに、『日本資本主義の米価問題』（亜紀書房、1968年12月）や『現代日本の経済的諸問題』（税務経理協会、1977年5月）などの現状分析の分野にわたっております。

『地代の理論』は、戦前・戦後を通して、わが国は勿論、国際的に論争されてきた極めて難解な地代の問題点を、価値についての新しい理解にもとづいて解明した力作であり、今日、地代論研究者の必読文献とされております。

また『日本資本主義の米価問題』も、日本の米価政策の本質を理論的に解明した労作であり、そのなかの「米価問題の理論的考察」は、戦後発表された日本農業に関する数百編の論稿のなかから、その代表的論文として選ばれた9編の1つとして、『食糧管理制度論』（近藤康男編、農山漁村文化協会、1982年1月）に収録されております。

先生は学会および社会においても活動されました。日本経済政策学会の幹事・理事を長く歴任され、また経済理論学会、日本経済政策学会などの大会で報告者ならびに討論者として活躍されました。とくに、先生は戦後日本資本主義が再編され、変貌をとげていくなかでの農業問題をめぐる論争においても、学界を主導する積極的な役割をはたされました。

また先生は、社会主義社会の経済政策研究のため、1979年から1989年の間に、朝鮮民主主義人民共和国を十数回にわたって訪問し、その成果を『経済政策論序説』

(文真堂, 1985年12月)の著書や, その他の諸論文で発表するほか, バングラデシュ(1981年), インド(1982年), ノルウェー(1983年), ポルトガル(1984年), オーストリア(1985年と1986年), パキスタン(1987年), エクアドル(1990年)での国際会議に出席し, 研究発表を行い, 学術の国際交流を一層深めることに貢献されました。

先生の立教大学での30数年間は, 日本社会にとっても, また立教大学にとって激動の時期でありました。この激動のなかにあつて, 先生は平和と民主主義を求める活動の先頭におられました。飾り気のない, 気さくな庶民性が, 先生の大きな人間的魅力でもあり, 学内外の多くの人々より敬愛されておりました。

立教大学は, 先生の学術上, 教育上の功績の顕著なことにより, 1990年6月, 先生に名誉教授の称号を贈りました。

いま, 先生の定年退職を迎え, 経済学部的发展に尽されました先生の御功績を永くとどめるため, 本号を先生の記念号といたします。

先生のこんごの御健康と御活躍を祈念すると同時に, これまでと変わらぬ御助力を本学と経済学部のために賜わりますようお願いいたします。

1990年7月

経済学部長 丸山 恵也